

令和 6 年度 第 2 回八代市子ども・子育て会議 会議録(要旨)

【日 時】 令和 6 年 10 月 18 日(金) 15 時 30 分～16 時 35 分

【場 所】 八代市役所 3階 301会議室

【出席者】(会長) 梅野 雄二委員

(副会長) 岩坂 富美委員

松本 展武委員 山本 由紀委員 松本 啓佑委員

木村 理恵委員 江口 怜那委員 寺田 公子委員

宇佐美 純代委員

【欠席者】 本吉 菜つみ委員 兒玉 志保委員 村本 恭子委員

藤本 一寿子委員 山本 有璃委員

【議事内容】

(1)八代市こども計画のスケジュールについて

(2)八代市こども計画のスケジュールの素案について

(3)その他

議事(1)八代市こども計画のスケジュールについて

【資料1説明】

議事(2)八代市こども計画のスケジュールの素案について

【資料3説明】

(A 委員)

この素案について、「妊娠期から子育て期までの課題として捉えている」というお話があった。一方で、今回の計画の素案に関するアンケート等は、コロナ禍の 3 年間に加え、その前後の期間も含めた 5 年間の内容である。その中で多くの方が子どもを預ける施設や相談場所に関する回答をした。ただし、このアンケート結果をそのまま素案に反映させるのではなく、今後改めて、より安定した時期にアンケートを取り直すことが必要ではないか。

8 つの方針のうち、方針 4 のライフステージに応じた支援という部分について確認したい。「ライフステージ」という言葉の主語が不明確なため、内容の理解や伝わり方が大きく変わる可能性がある。どのような主語で述べられているのか明示していただきたい。

また、妊娠期間中のサポートについて、妊娠できない女性たちへの支援も含まれていると認識しているが、実際に非常に頑張って妊娠に至ったお母さん方もいる。そのような方々への支援は、心のケアが重要であると考えている。現在、高齢出産が増えている一方で、

若い世代の出産も見られているため、双方に対応した支援策が必要である。これを方針に反映させるかは難しいかもしれないが、現実としてそうした状況が存在していることを何らかの形で取り入れていただきたい。

さらに、「ヤングケアラー」と呼ばれるこどもたちにも言及したい。彼らは非常に辛い状況に置かれているにもかかわらず、自ら助けを求めることができないケースが多いと聞いている。今年の夏、登校拒否や引きこもりの問題が増加しているとの報告もあった。こうした問題に対しても、より細やかな支援を盛り込んだ施策が必要であると考えている。

(こども未来課)

まずアンケートについて、ご指摘の通り、現在実施しているアンケートがコロナ禍の影響を受けている可能性がある。安定した時期のアンケートの実施については、今後検討させていただきたい。今回の計画策定後、次年度以降も内容の確認や見直しを随時行っていく予定であり、その際にいただいたご意見を踏まえながら進めていきたいと考えている。

方針 4 にあるライフステージに関しては、基本的にはこどもに対するライフステージに応じた支援が主な内容となる。しかし、当然ながら子育てをしている家庭に対しても、様々な支援を充実させる方針としている。また、今回の計画では若者に対する施策も新たに追加しており、これまでの枠を超えて、不安を抱える若者に対しても対応していきたい。

妊娠から出産期のケアについて、現在、健康推進課において様々なケアを実施している。具体的には、産後ケアや、妊娠期からの保健師によるサポートを通じて、不安や悩みに寄り添いながら対応している。こども未来課においても、支援が必要な方に対しては、健康推進課と連携して支援を続けていきたい。ケアの充実については、今後の課題であると認識しており、何らかの施策を検討していきたい。

ヤングケアラーに関して、国の方でも様々な説明会が開催されており、私たち職員もその研修を受けている。現在、虐待リスクの高い家庭に対する支援を行っており、ヤングケアラーである場合には、関係機関と連携しながら、訪問事業の実施や、各種サービスに繋げるなど、その解消に努めている。全市的な対応は、今後も引き続き検討を進めていきたい。

(A 委員)

ライフステージについて、主語がこどもや子育て中の親であることは理解している。ただ、今回、国がようやくこどもに焦点を当て始めたのは重要な動きである。

そこで、もし個別の素案があるのであれば、こどもでも理解できるような内容にさせていただきたい。例えば、市の計画を、こどもが読んでも分かりやすい形で作成し、こどもたちが「こういうふうに意見を言っているんだ」ということが分かるようにしてほしい。これはヤングケアラーや、声をあげられないこどもたちにとっても、意見を表明する場を作るきっかけになると考えている。

どうしても大人の目線で語られがちであるが、大人が一方的に意見を述べるものでは

なく、こどもたちが自分の声を伝えられる環境を作ることが、この計画において非常に大切にされるべきである。そういった「こどもが分かる、こどもが意見を言える」計画の作成を進めていただきたい。それが本当の意味での「こどもを中心に据えた政策」となるのではないか。

議事(3)その他

(こども未来課)

子育てに関する有識者の皆様が集まっておられるので、こども計画素案に対するご意見やご質問があれば、ぜひ伺いたい。

(B 委員)

素案として非常に素晴らしい内容であると思う。ただ、今日初めてこども計画の位置づけを説明いただき、資料 3 の「こども大綱」や県の計画、さらに全庁的な取り組みとしての説明があったが、実際に各課が横断的に協力できるかどうか課題だと思う。

縦割り行政が問題視されている中で、各課が連携して取り組むことが本当に可能か、しっかり見守りたい。特に、子ども・子育て計画が全庁的に推進されるよう期待している。現在、人口や出生数が減少しており、4 ヶ月児健診でも参加者が少ない状況が見受けられる。私は医師として地域の医師会にも関わっており、地域の課題に対して頑張っていくつもりだが、行政もしっかりと取り組んでいただきたい。

(C 委員)

私も子育て支援の仕事をしている。お母さん方と接する中で、最近よく話題になるのが市の保育料無償化についてである。無償化に対して非常に喜ばれ、次のステップに進めるという声も多く聞かすが、一方で、ご主人の仕事や転勤の関係で 3 歳までは家庭で保育をしたいと考えるお母さんも多い。そのような方々からは「自分たちは保育料無償化の恩恵がない」との声も上がっている。

また、この暑さの中で公園に行けず、月齢制限のある子育て支援センターも多いため、安心して親子が遊べる場所がもっと必要であると感じている。八代市には、こうした親子が安心して過ごせる場所を増やしていただけるとありがたいと常々思っている。

(D 委員)

私はこれから保育者として働こうと思っているが、今回の素案を聞いて、基本理念にある「安心してこどもを生み育てることができるまち」を作ることが大切だと改めて感じた。地域全体で子育てを支える体制が必要であり、保育園や幼稚園にこどもを預ける親も、その支援を受けるべきであると考えている。

今後、保育士として、こどもや保護者同士のつながりを作り、地域の結びつきを深めて

いくことが大事だと思う。このこども計画に基づいて、こどもと関わるすべての人が一緒に「育てるまち」を目指していければ良いと感じている。

(E 委員)

基本施策の中で、民生委員・児童委員の取り組みや相談体制の強化が盛り込まれているが、その役割について、市民の多くは民生委員を高齢者のお世話をする役割として理解しているのではないと思う。私は主任児童委員として主にこどもの福祉に関する相談を受けている。具体的には子ども食堂を運営している。この子ども食堂は貧困家庭に限らず、どなたでも参加できる場であり、保護者との交流もある。

この計画には、こうした具体的な取り組み、例えば子ども食堂の活動をもっと盛り込んでも良いのではないかと感じた。また、民生委員・児童委員が子育てにも関わる団体であることを、さらに市全体でアピールし、広めていただければと思う。

(F 委員)

多くの課題がある中で、今回のテーマや方針が実現すれば非常に良いと感じている。「安心してこどもを生み育てることができる」という目標も、ぜひ実現していただきたい。また、今後さらに新たな課題が出てくる可能性があるため、そういった点も含めて対応していく必要があると考えている。

(G 委員)

計画自体は充実や推進を図るものとして非常に良い内容であると感じる。不妊治療に関する話題があったが、県の事業の中でも「妊娠適齢期」の認知が低いという声が出ており、これについては若いうちから正しい情報を周知していくことが重要である。将来のライフデザインを考える際に、妊娠適齢期を思春期の若者に対しても伝え、早期に情報提供をしていただけると良いのではないかと。

また、ワーク・ライフ・バランスについて、市の職員の中には子育てをしながら働いている者が多く、実際に話を聞くと、育児と仕事を両立させるための具体的なアイデアや改善策をたくさん持っている。こうした職員の意見や提案を取り入れることで、計画の内容がさらに充実するのではないかと考えている。

(H 委員)

素案を拝見し、これが一つ一つ実現されれば、八代市が素晴らしい街になると期待している。私は幼稚園や保育園に関わっており、今年から学童保育も始めた。今年は特に暑かったため、真夏の過ごし方が大きな課題となった。小学生は体力があり、室内での活動に苦労したが、八代市にはこどもたちが思い切り体を動かせる施設が少ないと感じている。もっと小さなこどもや学童のこどもたちが安心して遊べる場所が増えると良い。

また、こどもが増えるためには、そもそもどうすればこどもが生まれる環境を整えられるかも課題である。以前、荒尾市が結婚支援として、職員が面談を通じてカップルをマッチングさせる取り組みを見たことがある。こうした結婚支援策もこどもの増加に繋がる一つの方法として検討していただければと思う。

(I 委員)

こどもがどんどん減っている現状は皆さんもご存知の通りである。現場の声や状況も様々で、異なる視点があると感じている。保育者としては、こどもを中心に见ているが、そこには親や祖父母も関わっており、委員の皆さんとも深い関係があると思う。

こどもを中心に据えた社会やこどもの権利が議論される中で、こども自身が意見を伝えるのは難しい部分もある。だからこそ、保育士や医療関係者、祖父母など、多くの関係者が連携し、行政とも情報交換を重ねることが大切だと思う。この素案が実際に動き出すためにも、今後さらに密な連携が必要だと感じた。

閉 会